

明德義塾中学校・高等学校

新シリーズ：「International Boarding School」で学ぶ 第3回

明德義塾で学び得たこと

高校教諭（英語） 市原 庸子

3月。今年もまた多くの生徒が巣立っていきました。この人里離れた谷間で過ごした3年間（中学から入学の生徒は6年間）。彼らはどんな思いでここでの日々を過ごしてきたのでしょうか。彼らが残してくれた作文から、それを探ってみることにしました。

A 君

入学して約3ヶ月。高校1年生のA君が1学期を振り返って「後悔したことが多すぎる」という題で書いた作文です。

明德に来て後悔した。朝は毎日朝礼があるし、先輩は怖いし、勉強は難しいし、細かいところまできちきちしくてはいけないし、家に帰れないし、親に会えないし、中学校のころの友達とは遊べないし、テレビが見れないし、ゆっくりできないし、いやなことだらけで、最初の1ヵ月半は地獄だった。

覚えることがたくさんあって、ミスして先輩に怒られまくって、本当にしんどかった。

「何で明德に来たんだろう。普通の高校に行けばよかったのに」とすごく後悔した。

でも、ミスして怒られるのは自分がいけないからで、自分がちゃんとしたら明德生活も楽しくなると思って前向きな考えを持って頑張っていたら、自然と楽しくなってきた。

「自分は当たり前のことができていなかったただけなんだ」と思った。

勉強は赤点を取らないように頑張って、部活はしんどいけど、それを覚悟して入ったんだから頑張れる。

今の明德生活が一番楽しい。今では明德に来てよかったと思っている。

ほとんどの生徒が、高1の1学期は「しんどかった」「慣れるのに大変だった」という感想を述べています。生活のリズムがつかめず、わけもわからないまま無我夢中で過ごしているうちに、あっという間に3ヶ月が過ぎてしまっていた、というのが共通の思いのようです。

このA君は、卒業する前に書いた作文で、「厳しく、楽しかった明德ライフ。3年間頑張ってよかったと思える自分が幸せだ」と書いています。

B 君

次は中学1年生から6年間明德で過ごしたB君です。北海道出身の野球部の生徒です。

明德に入学し、6年が経った。自分は成長できたのだろうか。何か変わったのだろうか。

ついこの間まで小学6年生だった。何でもかんでもの役割は、自分ではなくお母さん。そんな子が、この山に入りたかった理由、それは「挑戦」。日本一のチームに混ざって、自分自身がどこまでやっていけるかという挑戦。このご時世には、どうにもミスマッチな人里離れたこの山奥で、どんなに厳しい生活にも耐えられるかという挑戦。たくさんの挑戦を掲げた。でも正直言って、辛かったことのほうが多かったかもしれない。規則正しい生活も、練習も、学校も、毎日を戦っていたのかもしれない。それでも乗り越えられた。その力が出たのは、毎日と一緒に戦った仲間であり、先生方に助けられたからだろう。

この六年間、明德で学び続けさせてくれた両親には、お礼を言っても言っても言い足りない、感謝の気持ちでいっぱい。金銭的な面だけでなく、精神的にもものすごく心配をかけ、迷惑をかける度に、助けてくれた。

ここで本当に数えきれないほどのことを学ぶことができた。その中でも、友達に、先生方に、そして両親に「感謝」できるということは、とても幸せなことだと、今身

